サバイバー～ある夏の記録～

久方　シズコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サバイバー～ある夏の記録～

【Ｎコード】
Ｎ５４５２Ａ

【作者名】
久方　シズコ

【あらすじ】
僕はあることから一週間極貧生活をすることになってしまった。
現代の日本にいながら真夏のサバイバルがはじまる。

【第1話：8月18日　ことの始まり】

その夏、ニュースでは過去最高の猛暑を報じていた。
僕のアパートは西向きで、どういうわけか冬は寒く夏はくそ暑い。
そんな夏のある日に僕は地獄を経験することになる。
しかし、当初の僕は待ち受ける地獄など知る由もなく、先輩にただで譲ってもらったバイクにウキウキしていた。

「それにしてもラッキーだったなあ。先輩もタダで譲ってくれるなんて太っ腹だよな♪」
僕はついさっき先輩からバイクを譲り受けたところで、先輩の家からバイクに乗って帰路についている所だった。
バイクはかなりボロボロで、カラーリングは剥げ、ランプは割れ、いたる所が錆付いていた。
それでも貧乏な僕は乗れればなんでもよかった。

しばらく走ると右手にガソリンスタンドが見えた。
そういえば先輩がガソリンがそろそろなくなる、ということを言ってたっけ。
ここから僕のアパートまではまだ時間がかかる。
僕はそのまま右折してガソリンスタンドに入った。

「満タンで。」
「あいよ。」
ガソリンスタンドのおっちゃんは人のよさそうなニコニコ顔で、鼻歌まじりにガソリンを注入し始めた。
僕はこれから始まるであろうルンルンドライビングライフに思いを馳せ、心弾ませた。
彼女なんかもできちゃったりして～うへうへ（笑）

しかしゴプゴプッという音で我に返った。
見ると、（思わず二度見してしまった）おっちゃんはオイルを入れる方にガソリンを入れていた。しかも溢れるほど…
「おっちゃん、そこ違う！」
「あちゃっ！」
おっちゃんはペロリと舌を出し、いけね！っという表情をしたがすぐに笑って
「大丈夫、大丈夫☆ガソリンもオイルも同じようなものだから。」
と言って何事もなかったかのようにガソリンタンクにガソリンを入れ始めた。
そうなんだ、問題ないんだ…と思った僕はそのままガソリンスタンドを後にした。

しかし思えば僕の戦いはここから始まっていたのだった。

【第２話：８月１８日　豚カツと給料日】

ガソリンもオイルも同じ。
よく考えたらそんな筈がない！というのが僕の答えだった。
その距離わずか２０ｍ。
信号が赤にかわり、僕はアクセルを緩めた。
その時ブルルル…と情けない音を出してエンジンが止まった。
「えぇっ！？オイ、嘘だろ？」
何度もエンジンをかけようとするが、なかなかかからない。
そうしている間に信号は青になり、後ろから車が、原付が、自転車が追い抜いていく。
焦りながら振り向くと、大型ダンプが接近していた。
あんなのにぶつかられたらたまったものではない！
「くそっ、かかれ！かかってくれ～！」
思いっきりエンジンをかけた瞬間やっとエンジンがかかり、走りだした。

「危なかった…。」
このままでは危ない、と思った僕は帰りつくとまずバイク屋に行ってオイルを交換することにした。

「えぇ！？」
ガソリンスタンドでのおっちゃんの話をしたときのバイク屋のお兄さんの反応。
やっぱ問題だったんだ…。
よく陽に焼けたお兄さんは耳を疑ってか何度か聞き返し、半笑いで
「そりゃ問題でしょ。」
と言った。
とにかくバイクは一日預かってもらうことになり、その日は歩いて

帰った。

その晩、定食屋でご飯を食べていた所に電話がかかってきた。
僕は丁度頼んだ豚カツ定食がきた所だった。
バイトの給料日まであと一週間だったが、いつもに比べると財布に余裕があったので少し高めの豚カツ定食を頼んだのだ。
電話の相手はバイク屋のお兄さんだった。
「バイク、見てみたんですけどエンジンのかかりが悪いのはオイルのせいじゃないみたいですね。部品が悪くなってるんで変えるのに５０００円かかりますけど…いいですか？」
僕は急いで湯気をあげる豚カツ定食とむっすりと立つ定食屋のおやじを見比べたが、５０００円くらいならと渋々承知した。

次の日、バイクが治ったという連絡がきた。この日が８月１９日。
給料日まであと６日。

【第3話：8月19日　バイク屋は日焼けして】

バイク屋に向かった僕を迎えたのは昨日のお兄さんではなくおじいさんとも見えるおじさんだった。
僕が彼をおじさんと判断したのはがっしりとした体格と昨日のお兄さん同様よく陽に焼けた肌のためだ。
おじさんはバイクをいじっていたが顔をあげて僕を見ると、“あぁ、”という顔をしてのっそり立ち上がった。
「あの…バイクを受け取りに来たんですが。」
「おう。こいつだろ。」
おじさんが指さした店内の端に僕のバイクが置いてあった。
僕のバイク！！
僕のバイク…？
「綺麗になりすぎじゃないですか…？」
「おう。やっぱバイクは大事に乗ってやらねえとな。いろいろ部品かえて治しといてやったぜ。」
「あ、ありがとうございます！」
しかしこの感謝の言葉、今では返してほしいくらいた。
おじさんがくわえタバコでにこやかに手渡す領収書にはなんと
「いっ…一万五千！？」
わなわなと震える手で財布を覗き込むと一万五千と百円玉二枚が。
バイクの修理は終わっている。まさかもとのように壊して安くしてくれなんて言えるはずもない。
おじさんの白いシャツからは隆々とした筋肉がちらついている。
僕は泣く泣く諭吉と一葉にさよならを言うほかなかった。

しかし、残り二百円で給料日の25日まで生き延びれるだろうか。
僕には到底そんな自信は湧きそうになかった。
僕はなんとか“僕救済策”を考えだすことにした。

考えた結果、僕が出した結論は銀行に行くこと。
ショボ結論ですが何か？
しかし、この時期僕はとことん運に見離されていた。
きっと運命に振り回される僕を見て神様はウケケ、とか笑っていたに違いない。
そのくらい信じられない不幸だった。

【第４話：８月１９日　サバイバーになる】

銀行に行った僕はとにかく一週間生き延びるための食費、２千円をおろそうとした。
が、どういうわけかおろすことができない。
不思議に思い残高を見てみるとなんと残り…１８円！？
そういえば先月も飲み会やら何やらで食費が苦しくなりお金をおろしたような…。
しかし残り１８円はひどい！
これじゃチロルチョコも買えないじゃないか。
ここは母親に頼るしかない。
毎月家計簿を前にため息を吐く母親を思うと心苦しくはあるが飢え死にするよりはましだ。

トゥルルルル…

トゥルルルル…

トゥルルルル…

はっ…！
僕は重大な事実を失念していた。
今両親は数十年ぶりに旅行にいっているのだ。
「お父さんが久々に二人で旅行でもいかないかって。」
母親の嬉しそうな声を思い出す。
ということは今実家には誰もいない。
期間は確か…
「お父さん妙にはりきっちゃって有給とって一週間も！」
一週間も！

だから携帯を買えって言ったんだ！今や僕は両親とまったく連絡のとれない状態となってしまったのだ。

ぼくはとりあえずわらにもすがる思いで１８円をおろし、家に帰った。
テーブルの上に１００円玉二枚と１８円。
さて、これからどうやって生きようか。
戸棚をあさってみると米２合とフリカケ一袋、残りわずかの醤油があった。
普段から自炊をしないためにストックも乏しい。
とりあえず食事は一日一食だ。
米２合があれば一日半合食べれば四日間食いつなげる。
その後は二百円でなんとか生き延びよう。
これはサバイバルだ。
一歩でも選択を間違えば僕は死ぬ。
一週間生き残る。
それが今の僕の目標だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5452a/

サバイバー～ある夏の記録～

2011年1月14日14時32分発行